

所属	看護学研究科 看護学専攻 修士課程 コミュニティ看護学分野	修了年度	平成 29 年度
氏名	平塚 久美子	指導教員 (主査)	安齋 ひとみ

論文題目	長期化したひきこもり状態にある人の 60 歳を超えた母親の思いと望む支援
------	--------------------------------------

### 本文概要

**目的：**本研究の目的は、長期化したひきこもり状態にある人の 60 歳を超えた母親が抱えている思いは何か、望んでいる支援は何かを明らかにすることである。

**方法：**半構成的インタビューによる質的記述的研究。家族会に参加し 10 年以上のひきこもり状態の人の 60 歳を超えた母親計 7 名を対象とした。逐語録を作成し①「長期化したひきこもり状態にある人の 60 歳を超えた母親の思い」と②「長期化したひきこもり状態にある人の 60 歳を超えた母親の望む支援」の 2 つの視点からコードを抽出しカテゴリー化した。

**結果：**それぞれの視点から各 6 カテゴリーが抽出された。①の思いでは【自分の理解を超えた子】【地図（マニュアル）のない迷路】【加齢で変化を迫られる親役割】【周りに気を許せず孤軍奮闘】【子と距離を置いた自分の人生】【心の扉を開けたふっきれた世界】、②の望む支援では【ひきこもりの子に歩み寄りやっとの思いで外に出ることに寄り添いその手を離さない支援】【ひきこもりを学び親子を後押ししてくれる支援者・担当者】【働く事だけを目指さない長く続けられる支援】【ひきこもりの子が一人で生きる将来のために安心できる制度】【ひきこもりの原因解明につながる研究】【ひきこもりの正しい理解の普及】のカテゴリーが得られた。

**考察：**母親は自分の理解を超えた子とぶつかり合い関わることで子を理解していく変化の中、辛く苦しい思いから、その先の思いに変化する場合がありますそれを進めることが支援の鍵になると示唆された。

**結論：**1. 長期化したひきこもり状態にある人の 60 歳を超えた母親は、《子と話す事で子の気持ちが分かる》ようになり《子とぶつかり合い子への見方がかわり、子が一番つらいんだということがわかった》ことによって、【自分の理解を超えた子】への新しい理解につなげ《子に対して生きているだけでいい、そのままいいという気持ち》に変化していた。

2. 【地図（マニュアル）のない迷路】に迷い【周りに気を許せず孤軍奮闘】する辛く苦しい思いは母親に共通しているが、【自分の理解を超えた子】への新しい理解や【子と距離を置いた自分の人生】に気付き、《母自身が安定している》ことや《ひきこもりを隠さないという世間への覚悟》で、【心の扉を開けたふっきれた世界】に移行できる場合もある。

3. 【ひきこもりを学び親子を後押ししてくれる支援者・担当者】や【働く事だけを目指さない長く続けられる支援】、【ひきこもりの子が一人で生きる将来のために安心できる制度】、また【ひきこもりの正しい理解の普及】などを望んでいた。

**Key words** ひきこもり、 長期化、 母親、 思い、 支援